

■研究推進委員会 活動計画書

提出日：2018年10月31日
理事会承認日：2018年12月8日

名 称	生態工学研究推進委員会
委員長	氏名（所属）：倉本宣（明治大学）
幹 事	氏名（所属）：八色宏昌（景域計画（株）） 連絡先 e-mail アドレス：yairo@keiiki.co.jp
その他 構成員	氏名（所属）： 板垣範彦（いきものランドスケープ）、井上剛（（株）地域環境計画）、裏戸秀幸（横浜市）、大澤啓志（日本大学）、勝野武彦（日本大学名誉教授）、亀山章（（公財）日本自然保護協会）、黒田貴綱（日本大学）、近藤哲也（北海道大学）、園田陽一（（株）地域環境計画）、趙賢一（（株）愛植物設計事務所）、徳江義宏（日本工営（株））、中尾史郎（京都府立大学）、並木崇（（公財）世界自然保護基金ジャパン）、中村忠昌（（株）生態計画研究所）、春田章博（春田環境計画事務所）、日置佳之（鳥取大学）、逸見一郎（（一社）自然と文化創造コンソーシアム）、宮本 渉（（株）地域環境計画）、森本幸裕（（公財）京都市都市緑化協会）、養父志乃夫（和歌山大学）、渡邊敬太（箱根植木（株））
目 的	生態工学の技術の体系化と普及活動
活動計画 及び 想定される 成果 （1年目）	<p>1. 活動計画</p> <p>(1)平成 31 年度日本造園学会全国大会ミニフォーラムの企画・運営 平成 31 年度日本造園学会全国大会ミニフォーラムにおいては、「市民科学と造園学」をテーマとし、公園緑地を主たるフィールドとして展開されている市民科学について、調査の主体、調査の精度、成果の計画への反映など、実務との関係を重視して、議論を深める。</p> <p>(2)(仮称)都市林シンポジウムの開催 平成 30 年度日本造園学会全国大会ミニフォーラムにおいて、「都市林の生態系サービス活用ー都市林業の可能性を探るー」を開催し、公園緑地、特に比較的大規模な都市林における「生態系の供給サービス」に着目し、林産物の生産・販売等により一定の収益を上げるとともに生物多様性の維持向上にも資する仕組みについて、先進事例を紹介しながら議論を行った。議論の結果、都市林においては、供給サービスをまだ発揮できていないことや、収穫物の適切な取り扱いの手法等の課題が示された。 以上の議論を踏まえ、都市緑地の適切な経営推進、都市林の供給サービスの発揮、収穫物の適切な取り扱いの手法を検討することを目的に、「(仮称)廃棄物から林産物へ～いずれ来る都市林の更新～」をテーマとして議論を深める。シンポジウムは平成 31 年 6 月から 7 月頃を目標に開催する。</p> <p>(3)「生きもの技術ノート」および「用語解説」の企画編集 昨年度に引き続き月に1回の研究推進委員会を開催し、学会誌に連載中の「生きもの技術ノート」(年 4 回)および「用語解説」の企画立案、編集作業を継続的に実施する。</p> <p>(4)出版企画 平成 30 年度日本造園学会全国大会ミニフォーラム及び平成 31 年度の(仮称)都市林シンポジウムの都市林に関する議論の成果を受けて、都市林に係る出版準備を行う。</p> <p>2. 想定される成果 時節の課題である都市林等の生態系サービスの発揮や適切な管理と経営推進に関して、実務分野の関係団体との連携を図り、生態工学的アプローチにより研究を進めることにより、ランドスケープ分野における研究開発の推進と社会的発信および実務分野における技術的活用が期待される。</p>

	<p>また、学会誌を通じて生態工学に関わる技術的事例および最新の関連用語に関する情報提供を学会員に対して行い、あわせて、出版活動を通じて、生態工学に関わる学術と技術の体系化および普及が図られることが期待される。</p>
<p>(2年目)</p>	<p>1. 活動計画</p> <p>(1)平成 32 年度日本造園学会全国大会ミニフォーラムの企画・運営 平成 31 年度開催予定のシンポジウム「(仮称)廃棄物から林産物へ～いずれ来る都市林の更新～」の成果から、都市林等の生態系サービスの発揮や適切な管理と経営に関して、実務分野で応用可能な技術および制度設計に関して議論を行うためミニフォーラムの企画・運営を行う。</p> <p>(2)「生きもの技術ノート」および「用語解説」の企画編集 昨年度に引き続き月に1回の研究推進委員会を開催し、学会誌に連載中の「生きもの技術ノート」(年4回)および「用語解説」の企画立案、編集作業を継続的に実施する。</p> <p>(3)出版企画 平成 30・32 年度日本造園学会全国大会ミニフォーラム及び平成 31 年度の(仮称)都市林シンポジウムの都市林に関する議論の成果を受けて、都市林に係る出版を行う。</p> <p>2. 想定される成果 都市林等の生態系サービスの発揮や適切な管理と経営に関して、実務分野において応用可能な技術および制度設計検討を行い、出版化することで都市林における研究および実務分野における活用が期待される。</p> <p>また、学会誌を通じて生態工学に関わる技術的事例および最新の関連用語に関する情報提供を学会員に対して行うことを通じて、生態工学に関わる学術と技術の体系化および普及が図られることが期待される。</p>